

女子学生による自己開示の開示内容面と 心理面に関する日中対照研究

一二三 朋 子

1. はじめに

日本国内の留学生は平成 23 年 5 月現在 13.7 万人である。留学生歓迎会やチューター制度など、留学生と日本人学生が交流する機会は増加しているにもかかわらず、双方の間には必ずしも深い関係が築かれるわけではない。深い関係が築かれにくいのは、友情観の違い（上原・鄭・坪井，2011）や自己開示即ち、他人に自分自身の情報を示す行為（Jourard, 1971）の文化差に因があるのではないだろうか。日本人学生の自己開示について、日本人学生同士では関係的領域（人間関係・異性関係・心傷など）の自己開示が多くなされるのに対し、留学生との間では志向的領域（将来・目標・勉学など）に限られることが明らかにされている（横田，1991）。つまり、日本人学生同士では私的領域に踏み込んだ親密な自己開示が多いのに対し、留学生との間では、公的領域の建前的な自己開示が多いことがうかがえる。

また、自己開示における文化差が誤解を生む可能性も考えられる。日韓の女子大生の自己開示について、全（2010）は、韓国人のほうがより多くの自己開示を行い、自分の感情・感想・評価などに関する自己開示を行うこと、初対面場面に対する意識やプライバシーの概念・社会文化的概念の違いがあることを報告している。このような文化差をわきまえずに日韓の女子学生が出会って自己開示を行えば、互いに何らかの失望感や違和感・誤解を持つことが推測される。自己開示の使い分けや文化差は、日本人のイメージにも影響するであろう。事実、日本人は冷たい、曖昧だ、裏表があるといったイメージを抱かれるという報告もある（山口，2001）。

誤解を回避し良好な人間関係を構築するためには、自己開示が不可欠であるが、自己開示に関する文化差を踏まえていることは、無用な誤解や摩擦を予防することにつながるであろう。佐々木・張・鄭（2012）では、中国人留学生は、日本人に働きかける際に中国人同士の友人関係構築と比較対照しながらさ

まざまな工夫をしていることが指摘されている。つまり、異文化の者が出合い自己開示を行うとき、そこでは常に自国・自文化の者同士の自己開示と比較しながら、異文化の相手にどのような自己開示を行うべきかを工夫すると推察される。異文化の相手との円滑な自己開示を行う前提として、まずは自文化の自己開示の特徴を明らかにすることが重要であろう。そこで本研究では、日本人学生と中国人留学生を対象に、同国人同士の自己開示を比較し、自己開示の文化差を明らかにすることを試みる。

2. 先行研究

本節では、人間関係構築に関わるとされる自己開示及び配慮の文化差に関する先行研究を概観する。

2.1 自己開示における文化差

自己開示に関する文化差については多くの研究がなされている。その中で、日中の自己開示を比較した研究としては顧（2010）が挙げられる。顧（2010）では日中の大学生を対象に質問紙調査を行い、日本人は感情を発散するという動機が強く、自己アピール的な自己開示が対人ストレスになるのに対し、中国人は自己アピール的な動機が強く、感情の発散が対人ストレスになることなどを検証している。

また、一二三（2010）は、文化的自己観が自己開示にどのように表れるかについて日中の大学生に焦点を当て、日本人学生は他者からの評価や思惑を気にしつつ相手の反応を見て開示内容や言葉遣いを慎重に選ぶのに対し、中国人学生は自分の正しいと思うことは自信をもって堂々と発言し自分の考えや感想をはっきり表わすと考察している。

また、自己開示は一方向的になされるものではなく、適切に話者交替しながら展開するものであろう。賈（2008）は話者交替について、日本人は参加者全員の意見を尊重する人間関係重視型、中国人は発話内容への関心を優先する内容重視型であることを明らかにしている。

自己開示の文化差の研究では質問紙による研究が多い中で、実際の会話データを用いた研究として、奥山（2005）、全（2010）が挙げられる。奥山は日本と韓国の同国人同士、同性同士の初対面場面で、自己開示に関わる言語形式に焦点を当て、全は日本と韓国の同国人・女性同士の初対面場面での会話における自己開示について出現頻度及び開示内容を分析し、日韓の文化差を明らかに

した。これら2つの研究は、従来の質問紙研究とは異なる知見を得た点で高く評価できる。しかし、使用された会話データが人工的な出会いによる初対面場面であるため、親しい者同士の自己開示の特徴は反映しきれていないという点が指摘されよう。

2.2 配慮における文化差

自己開示は人間関係を発展させるという効果を持つ反面、不適切な自己開示によって相手との関係を損なったり自分の信用や名誉を傷つけたりする危険も伴う。自己開示には、細やかな配慮が必要であろう。

Brown & Levinson (1987) は、人間には誰かに認められたいというポジティブ・フェイスと、誰にも邪魔されたくないというネガティブ・フェイスがあり、それぞれのフェイスを脅かさないように配慮しながらポライトネス・ストラテジーを駆使して円満な人間関係と円滑な会話を維持するという。

日中のポライトネス・ストラテジーを対照研究したものとして平・松村 (2011)、蒙 (2010)、王 (2011) などがある。これらの研究では、会話データや談話完成テストを用い、フェイスに配慮してどのようなポライトネス・ストラテジーが用いられるか、即ち言語行動に焦点を当てて日中の類似点・相違点を明らかにしている。

Brown & Levinson のポライトネスはフェイスに立脚した概念であり、フェイスを侵害する行動 (F T A) を説明するのには大変有効であるが、フェイスが強く関与しない会話 (例えば気楽な雑談など) にも援用が可能であろう。会話における配慮全般について心理学的に研究したものに一二三 (1995, 1999, 2003, 2004) がある。一二三の一連の研究は、会話参加者が行う一般的配慮を包括的に扱うものであり、概ね4つに分けられる。つまり、相手の発話を尊重し理解しようとする配慮、自分の意見や感想を率直に表現しようとする配慮、相手との対立を避け自己を抑制しようとする配慮、細かい事にこだわらず円滑に会話を運用しようとする配慮に集約できる。これらの配慮は Brown & Levinson のフェイスに関わる配慮と対応させることができる。

表1 配慮

一二三	Brown & Levinson
相手の発話を尊重し理解しようとする配慮	相手のポジティブ・フェイスを満たそうとする配慮
自分の意見や感想を率直に表現しようとする配慮	自分のポジティブ・フェイスを満たそうとする配慮
相手との対立を避け自己を抑制しようとする配慮	相手及び自分のネガティブ・フェイスを満たそうとする配慮
細かい事にこだわらず円滑に会話を運用しようとする配慮	フェイスと特別には関わらない配慮

これらの配慮は社会的文脈、即ち、相手の母語（相手が同母語話者か否か）、相手の日本語レベル（初級レベルか中上級レベルか）、話題（目的性が高いか否か）、日本語教授経験（3年以上か3年未満か）などによって変動することが検証されている（一二三、1995；1999；2000）。

自己開示における心理面、つまり、開示される自己に応じてどのように配慮がなされるのか、またその配慮にはどのような文化差があるのかを明らかにすることは、異文化の者との円満な人間関係を構築する上で重要であろう。

3. 研究課題

以上の先行研究を踏まえ、本研究では日本人学生と中国人留学生の親しい同国人同士による自己開示の特徴を様々な視点から明らかにすることを目的とする。以下に、分析の視点について述べる。

3.1 開示される自己の側面

まず、会話の中で、自己のどのような側面が開示されるのか、開示される自己の側面は、話題によってどのような違いがあるのかに着目する。本研究では、会話データを用いて、開示される内容を自己開示カテゴリー（表2）により分類した。自己開示カテゴリーは、自己開示質問紙 ESDQ（Enomoto Self-Disclosure Questionnaire）（榎本、1997）を枠組みとしている。自己開示に関する研究の多くで、Jourard & Lasakow（1958）の開発した JSDQ（Jourard Self-Disclosure Questionnaire）や ESDQ が使われている。JSDQ や ESDQ は、自己開示の傾向や他の心理的要因・性格特性との関係を調べるためには非常に有効である。本研究でも、開示される側面を分類する枠組みとして妥当であると考え、ESDQ を参考にして自己開示カテゴリーを設定した。

表2 自己開示カテゴリー（例は、本研究の会話データから引用した）

知的自己開示	知的関心事・知的能力・職業観など 例)「院出てからも根気よくやればなんとかなるのかな」
情緒的自己開示	感情・悩み・自分の性格など 例)「親に泣かれると辛い」
身体的自己開示	外見・体質・持ち物・日常生活など 例)「やっぱモテ系の服着れねえ」
社会的自己開示	社会的事象への感想や人間関係など 例)「原宿の店員さん怖かった」
応答的自己開示	相手の発話への意見・評価・助言など 例)「7年間服買っていないのはすごいね」
共感的自己開示	相手の発話への共感・同調など 例)「そうだよな、バイトだけでも生きていけるよね」

3.2 開示中の配慮

次に、自己開示中になされる配慮に着目する。自己開示をする際にはさまざまな配慮が必要であることが推測される。本研究では、質問紙によって、自己開示中に行った配慮を明らかにすることを試みる。

3.3 自己開示の効果

次に、自己開示の精神的効果に着目する。自己開示によって、どのような解放感や安心感・満足感が得られるのか。本研究では、質問紙によって自己開示後の気持ちを調べ、自己開示の精神的効果を明らかにすることを試みる。

3.4 開示された自己の側面と開示中の配慮・開示後の精神的効果との関連

開示された自己の側面と開示中の配慮・開示後の精神的効果は相互に関連し合うことが推察される。本研究では、会話データと質問紙によって、開示内容と心理面との関連を明らかにすることを試みる。

4. 研究方法

4.1 参加者

茨城県及び東京都の大学・大学院に在籍する日本語母語話者（以下、日本人）28名（平均年齢25.0歳）と中国語母語話者（以下、中国人）28名（平均年齢25.8歳）が調査に参加した。全員女性である。女性を対象とするのは、女性のほうが男性より自己開示度が高いという調査結果があること（Aries & Johnson, 1983; Caldwell & Peplau, 1982; Chen, 1995; 榎本, 1987）と、男

性同士の会話を録音したとき沈黙が長かったという筆者の経験より、女性のほうが自己開示を引き出し易いと考えたからである。参加者には事前に、同国の親しい友人と2人で参加するように依頼してあった。質問紙により、参加者の2人は同じ学部・研究科に1年以上所属し、今後も1年近くかそれ以上付き合う可能性があること、日ごろから「とてもよく話す」または「よく話す」相手であることを確認した。

4.2 データ

日本と中国の同国人の親しい女子学生同士が2つの話題で行った会話を録音したものと、会話後に行った質問紙をデータとする。

4.2.1 会話録音

日本人同士14組、中国人同士14組に「人生の目的（以下、目的）」と「好きなファッション（以下、ファッション）」という2つの話題でそれぞれ15分から20分の会話をしてもらい、その様子を録画した。尚、中国人の内1組は録音状態が悪かったため分析から除外した。

話題の順番効果を避けるために、「目的」を先に会話する組と「ファッション」を先に会話する組をほぼ半数になるようにした。会話の前に、会話の内容や話し方を評価するものではないことを伝えた。また、会話後の質問紙により、いずれの参加者も録音についてほとんど気にしていなかったことを確認した。このことから、参加者は普段とほぼ同じように自然な会話を行ったと判断した。

話題の選定に当たっては予備調査を行った。日本人学生25名・留学生11名に23の話題を提示し、話し易さを評定してもらった結果、話し易くかつ開示される自己の側面の違いを反映しやすいと考えられる「目的」と「ファッション」の2つを選定した。

4.2.2 質問紙

それぞれの会話後に質問紙調査を行った。本研究で取り上げる質問項目は次の通りである。

- (a) 話題に関する認知：2つの話題をどのように認知していたかを調べるための質問で10項目あるが、本研究では話題の深さの認知に関する2項目（「内面に深く関わる」「重要である」）を取り上げる。
- (b) 開示中の配慮：開示中どのような配慮をしたかを調べるための質問であり、岡崎・一二三（1995）及び一二三（1999）を参考に25項目を設けた（表4参照）。岡崎・一二三（1995）では外国人留学生を対象に、また一二三（1999）では日本語母語話者を対象に、会話においてどのよう

な配慮をしているかの質問紙調査を行っている。

- (c) 開示後の精神的効果：開示後の満足感や安心感などを調べるための質問であり、熊野（2002）を参考に8項目を設けた（表7参照）。

以上の35の質問項目について、どの程度意識していたか、またはどの程度当てはまるかを7段階で評定してもらった。尚、学習効果を避けるために、質問項目の前半と後半を逆転させたものを用意した。また、日本語に堪能な中国語母語話者2名によるバックトランスレーションで作成した中国語版質問紙も用意した。

4.3 調査時期

2008年5月から12月にかけて、茨城県と東京都にある大学内で調査を実施した。

4.4 会話の分析

4.4.1 会話の文字化

録音された会話を文字化し10秒ごとに区切る。中国語会話については1名の中国人留学生在が文字化・翻訳し、別の留学生在が漏れや誤訳がないかをチェックした。

4.4.2 開示された自己の側面の分類

10秒ごとに区切られた会話の中で、質問と相槌以外の発話を自己開示とみなし、自己開示カテゴリーに従って分類した。筆者以外に日本人3名・中国人4名の協力者（いずれも大学院生）と独立で行い一致率を調べた。平均一致率は日本人同士で87.4%、中国人同士で73.6%であり、一致しない部分は協力者と話し合って決定した。

4.4.3 出現時間

各カテゴリーの出現時間を10分間当たりの出現時間（秒）に直して分析に使用する。

5. 結果と考察

5.1 話題の認知

2つの話題を参加者が区別していたかどうかを確認するために、質問紙の「話題に関する認知」2項目の評定値について日本人・中国人それぞれに対応のあるt検定を行った。その結果、日本人・中国人共に「目的」のほうを「ファッション」よりも有意に高く評定しており（日本人 $t(27) = 10.30$, $p < .001$, $t(27)$

=9.11, $p<.001$;中国人 $t(25) = 4.46$, $p<.001$, $t(25) = 3.55$, $p<.001$), 「目的」のほうが「ファッション」よりも内面に関わり重要な話題であると認知していたことが確かめられた。

5.2 開示された自己の側面

会話データより、開示された自己の6つの側面について出身国によりどのような違いがあるかを検討する。自己開示カテゴリーの出現時間について2つの話題別に t 検定を行った。結果を表3に示す。

表3 各カテゴリーの出現時間の平均値・標準偏差・ t 検定結果

話題		出身国	N	平均値	標準偏差	t 値	
目的	知的自己開示	日 本	28	4.48	3.32	.03	
		中 国	26	4.45	2.43		
	情緒的自己開示	日 本	28	.69	1.16	2.31 *	日本<中国
		中 国	26	1.79	2.21		
	身体的自己開示	日 本	28	1.49	1.15	1.30	
		中 国	26	1.11	.99		
社会的自己開示	日 本	28	10.27	5.22	1.32		
	中 国	26	12.13	5.08			
応答的自己開示	日 本	28	1.34	.97	1.48		
	中 国	26	1.00	.73			
共感的自己開示	日 本	28	4.96	2.83	5.75 ***	日本>中国	
	中 国	26	1.41	1.42			
ファッション	知的自己開示	日 本	28	.07	.24	1.58	
		中 国	26	.00	.00		
	情緒的自己開示	日 本	28	.49	1.36	.23	
		中 国	26	.41	1.03		
	身体的自己開示	日 本	28	7.00	2.90	2.77 **	日本>中国
		中 国	26	4.89	2.67		
社会的自己開示	日 本	28	9.64	5.23	3.31 **	日本<中国	
	中 国	26	14.81	6.20			
応答的自己開示	日 本	28	2.02	1.74	3.29 **	日本>中国	
	中 国	26	.83	.60			
共感的自己開示	日 本	28	5.44	2.63	5.11 ***	日本>中国	
	中 国	26	2.07	2.15			

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

表3より、「目的」の話題において日中で有意差があったのは、「情緒的自己開示」と「共感的自己開示」であった。人生の目的について話し合うとき、中

国人は日本人よりも自分の将来に対する不安や悩みなどを多く開示する。一方、日本人は中国人よりも相手の気持ちに共感を示すような開示が多い。中国人は自分の感情を自発的に表明することに積極的であるのに対し、日本人は相手の発話に合わせて共感を示すことで、自分の感情を表明することがうかがえる。

また「ファッション」の話題において日中で有意差があったのは、「身体的自己開示」「社会的自己開示」「応答的自己開示」「共感的自己開示」であった。自分の好きなファッションについて話し合うとき、日本人は中国人よりも自分の持ち物や日常生活について気軽に開示することがうかがえる。また、日本人は中国人より、相手の発話への意見・評価や、相手への共感を多く表明していることも示された。

これに対し、中国人は母国と日本を比較し、両国の違いや母国での経験・母国での現状などに言及しながら自分の評価・意見を交えていく社会的自己開示を多く行う。これは、中国人が留学生であることの影響が考えられる。

以上の結果より、日本人は、相手の自己開示に意見・評価・助言を加えたり共感を表明したりして、相手の自己開示に積極的に関与しながら、協働的に自己開示を展開するといえる。一方、中国人は自分の感情面の自発的吐露や社会的事象について多く開示し、相手の発話に対してはあまり反応しない。一二三(2010)では、日本人は相手の反応に注意を払いつつ開示内容を慎重に選ぶのに対し、中国人は相手の思惑を気にせず自分の意見を開示すると考察している。また、賈(2008)は、日本人は人間関係重視型、中国人は内容重視型であるとしている。今回の結果は、一二三(2010)、賈(2008)の結果を実際の会話データにより裏付けるものであり、日中の自己開示の特徴を端的に捉えているといえよう。

5.3 自己開示中の配慮

5.3.1 開示中の配慮の特定

自己開示中の配慮について検討する。まず、開示中の配慮を問う質問項目の評定値に因子分析(主因子法とバリマックス回転)を施し、固有値1.0以上を基準として4因子を得た(表4参照)。第1因子は、相手の心中を押し測り、相手に対して押しつけがましくならないように配慮する項目から成り「控え目配慮」と命名した。第2因子は、助言したりほめたりしてリラックスした雰囲気を作ろうと配慮する項目から成り「積極的関与配慮」と命名した。第3因子は、自分の本音や意見をはっきり表明しようと配慮する項目から成り「本

音配慮」と命名した。第4因子は、意見や感想を控え聞き役になろうと配慮する項目から成り「感情抑制配慮」と命名した。

「控え目配慮」は相手のネガティブ・フェイスを満たす配慮、「積極的関与配慮」は相手のポジティブ・フェイスを満たす配慮、「本音配慮」は自分のポジティブ・フェイスを満たす配慮、「感情抑制配慮」は相手のネガティブ・フェイスを満たす配慮と捉えられる。

表4 配慮に関する因子分析結果

	1	2	3	4	共通性
【控え目配慮】 $\alpha = .86$					
押し付けない	.67	.05	-.10	.14	.48
相手に不都合なことには言わない	.64	.12	-.34	.05	.55
自慢は避ける	.62	-.03	.03	.09	.40
相手の興味に注意	.60	.33	.16	-.21	.54
慰めたり励ましたりする	.60	.47	.02	.13	.60
相手の本音を推測	.57	.40	.20	-.01	.53
にこやかにする	.56	.36	.13	-.21	.51
プライベートな質問はしない	.49	.05	-.20	.26	.35
最後まで熱心に聞く	.47	.21	-.06	.19	.31
相槌・うなずきを多用	.47	.14	.13	.03	.26
共感を示す	.47	.27	.21	.06	.35
相手の話への興味を示す	.45	.07	.25	-.09	.28
【積極的関与配慮】 $\alpha = .74$					
有益な助言をする	.14	.80	.19	.22	.75
積極的にほめる	.06	.64	.17	.08	.45
共通点のある話をする	.17	.49	-.14	-.02	.30
リラックスした雰囲気作り	.16	.48	.06	-.07	.27
意見感想を尊重する	.32	.39	-.14	.03	.28
【本音配慮】 $\alpha = .76$					
個人的なことでも積極的に話す	-.01	-.20	.69	.04	.53
否定的意見でも遠慮しない	.06	.21	.64	-.16	.49
遠慮せず本音を言う	-.10	.20	.63	-.20	.49
相手と異なる意見でも率直に言う	.02	.28	.58	-.27	.49
相手の個人的な話には返報する	.15	-.08	.53	.16	.34
【感情抑制配慮】 $\alpha = .55$					
意見感想をはっきり言う (逆転)	.20	.37	.19	-.59	.56
感情を抑える	.17	.14	-.02	.58	.39
聞き役になる	.30	.33	-.07	.55	.51
寄与率 (%)	16.61	11.99	9.93	6.00	44.53

5.3.2 開示中の配慮：出身国及び話題による違い

次に、各因子を尺度として尺度得点を算出した。その尺度得点を従属変数として出身国による違い、話題による違いを検討するため、出身国×話題の2要因の分散分析を行い、交互作用のあるものには下位検定を行った。結果を表5及び表6に示す。

表5 各尺度得点の平均値・標準偏差・分散分析結果

配慮	出身国	平均値 (標準偏差)		出身国要因 主効果 F(1, 52)	話題要因 主効果 F(1, 52)	交互作用 F(1, 52)
		目的	ファッション			
控え目配慮	日本	4.88 (.96)	4.26 (.87)	16.60 ***	12.66 **	12.42 **
	中国	5.33 (.60)	5.33 (.55)			
積極的関与配慮	日本	4.70 (1.39)	4.66 (.94)	6.76 *	.97	1.86
	中国	5.16 (.77)	5.42 (.59)			
本音配慮	日本	5.01 (1.15)	4.72 (.89)	7.36 **	3.40	.45
	中国	4.25 (1.00)	4.11 (1.07)			
感情抑制配慮	日本	2.50 (1.13)	2.17 (.94)	.76	10.78 **	.67
	中国	2.79 (.93)	2.26 (.76)			

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

表6 交互作用が有意であったものの下位検定結果

配慮	出身国要因 F (1, 52)		話題要因 F (1, 52)	
	目的	ファッション	日本	中国
控え目配慮	4.36 *	30.67 ***	4.37 ***	.28

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

分散分析及び下位検定の結果から、出身国及び話題によりどのような配慮が活性化されるかを以下に考察する。

(1) 「控え目配慮」

中国人は、話題によらず日本人よりも相手のネガティブ・フェイスを満たすように配慮しているが、日本人は、話題が内面に関わるか否かにより、相手への配慮を使い分けしていることがわかる。つまり、中国人は日本人よりも相手のネガティブ・フェイスを満たす配慮を活性化しているが、そこには話題による使い分けはない。平・松村 (2011) は、日中両言語のポライトネスにおける

一番大きな違いは、ネガティブ・ポライトネスに対する使用上の認識の違いであると指摘しているが、本研究でも、中国人はネガティブ・フェイスに対する配慮を話題によって使い分けることがないのに対し、日本人は話題によって相手のネガティブ・フェイスへの配慮を微妙に使い分けられていることが示された。日本人の配慮は、常に一貫して活性化されるのではなく、開示内容に応じて微妙に変動する配慮であり、中国人にとっては使い分けを理解するのが困難な配慮といえよう。

(2) 「積極的関与配慮」「本音配慮」

中国人は日本人よりも「積極的関与配慮」即ち相手のポジティブ・フェイスを満たす配慮を活性化するのに対し、日本人は中国人よりも「本音配慮」即ち自分のポジティブ・フェイスを満たす配慮を活性化することが示された。「積極的関与配慮」と「本音配慮」とはどちらもポジティブ・フェイスに関わる配慮であるが、相手のフェイスか自分のフェイスかの違いがある。「積極的関与配慮」は直接相手のポジティブ・フェイスに働きかけようとする配慮であるが、「本音配慮」は自分の本音を表明して相手に認められたいという自分のポジティブ・フェイスを満たしながら、同時に相手のポジティブ・フェイスをも満たそうとする配慮と考えられる。なぜならば、率直に本音を言うのは相手への遠慮や気兼ねがないこと、親近感や信頼感を持っていることを表明することであり、間接的に相手のポジティブ・フェイスをも満たすことにつながるからである。中国人のポジティブ・フェイスを満たそうとする配慮が単刀直入なのに対し、日本人のポジティブ・フェイスを満たそうとする配慮は少々屈折しているといえよう。

(3) 「感情抑制配慮」

日中共に、「感情抑制配慮」の尺度得点は低く、親しい友人同士の会話では感情を抑えたり相手に気兼ねしたりしないことがうかがえる。とはいえ、分散分析結果より、「目的」のとき「ファッション」よりも相手のネガティブ・フェイスを満たす配慮を活性化することが示されている。内面的な自己開示をしているときには、相手のネガティブ・フェイスを侵害しないように自分の感情を抑制する配慮が重要であることについては日中に違いがないことがわかる。

(1)から(3)の考察より、親しい者同士の自己開示中の配慮に関する日中の特徴は次のようにまとめられる。

日本人は親しい相手には率直に本音をぶつけ、遠慮していないことを示すことで親密感を高めようと配慮する。つまり、自分のポジティブ・フェイスを満

たしつづ相手のポジティブ・フェイスをも満たそうと配慮する。また、話題に応じて相手との距離を測りながら、相手のネガティブ・フェイスを満たすように配慮する。

一方、中国人は話題に応じた配慮の使い分けはせず、一貫して相手のネガティブ・フェイスを満たすように配慮する一方で、相手のポジティブ・フェイスには単刀直入に働きかけようと配慮する。

5.4 自己開示の効果

5.4.1 開示後の精神的効果

自己開示による効果について検討する。自己開示によって、どのような解放感や安心感・満足感が得られるのかといった、自己開示後の精神的効果を問う質問項目の評定値に因子分析（主因子法とバリマックス回転）を施し、固有値1.0以上を基準として2因子を得た（表7参照）。

表7 自己開示後の精神的効果に関する因子分析結果

	1	2	共通性
【理解深化】 $\alpha = .82$			
相手への理解が深まった	<u>.95</u>	.23	.96
自分のことを深く理解してもらえた	<u>.67</u>	.28	.52
他人の意見考えが聞けて参考になった	<u>.66</u>	.28	.52
気持ちが整理できた	<u>.47</u>	.33	.34
【感情浄化】 $\alpha = .83$			
ストレス解消になった	.19	<u>.76</u>	.62
元気が出てきた	.26	<u>.72</u>	.59
親近感が増した	.43	<u>.63</u>	.59
他人も同じことを知り安心した	.43	<u>.52</u>	.46
寄与率 (%)	31.42	26.46	57.88

第1因子は、互いの理解の深まりに関する項目から成り「理解深化」、第2因子は、ストレス解消など感情の浄化に関する項目から成り「感情浄化」と命名した。

5.4.2 開示後の精神的効果：出身国及び話題による違い

次に、各因子を尺度として尺度得点を算出した。その尺度得点を従属変数と

して出身国×話題の2要因の分散分析を行い、交互作用のあるものには下位検定を行う。結果を表8及び表9に示す。

表8 各尺度得点の平均値・標準偏差・分散分析結果

開示後の精神的効果	出身国	平均値 (標準偏差)		出身国要因 主効果 F (1, 52)	話題要因 主効果 F (1, 52)	交互作用 F (1, 52)
		目的	ファッション			
理解深化	日本	5.24 (1.14)	4.35 (1.13)	1.28	7.29**	7.90**
	中国	5.02 (.74)	5.04 (.86)			
感情浄化	日本	4.91 (1.36)	4.46 (1.44)	.23	1.56	3.23 †
	中国	4.78 (.93)	4.86 (.96)			

† p<.10 * p<.05 ** p<.01 *** p<.001

表9 交互作用が有意であったものの下位検定結果

開示後の精神的効果	出身国要因 F (1, 52)		話題要因 F (1, 52)	
	目的	ファッション	日本	中国
理解深化	.67	7.74**	3.11**	.11
感情浄化	.16	1.49	2.04*	.41

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

分散分析及び下位検定の結果から、開示後の精神的効果について、出身国及び話題によりどのような違いがあるかを考察する。

(1) 「理解深化」

日本人は内面的な話題に関する開示のほうが、軽い話題に関する開示よりも相互の理解が深まったと感じるのに対し、中国人は話題による違いを感じておらず、どのような話題の開示でも、開示し合うことで相互の理解が深まると感じることが推察される。

(2) 「感情浄化」

日本人は内面的な話題に関する開示のほうが、軽い話題に関する開示よりもストレスが解消され元気が出たと感じるのに対し、中国人は話題による違いを感じておらず、どのような話題の開示でも、開示し合うことでストレスが解消され元気が出たと感じることが推察される。

(1)(2)の考察から、日本人は開示内容によって開示後の精神的効果が変化するのに対し、中国人は開示内容によって開示後の精神的効果が変化すること

はない。つまり、日本人にとって自己開示の効果は開示内容によるところが大きい、中国人は開示し合うことそのものが精神的により効果を持つと考えられる。

5.5 自己開示と開示中の配慮・開示後の精神的効果との関連

前節までは、2つの話題のもとのような側面が開示されるのか、また、開示中にどのような配慮がなされるのか、開示によってどのような精神的効果があるのかを見てきた。本節では、開示内容と配慮及び開示後の精神的効果との関連を検討する。つまり、相手の開示する自己の側面によってどのような配慮が促進されるのか、配慮によってどのような側面を開示するのか、また相手の開示及び自分自身の開示によってどのような精神的効果が促進されるのか、について分析・考察する。

(1) 相手の自己開示と配慮との関連

まず、相手の自己開示によってどのような配慮が活性するのかを検討するために、相手の発話を分類した自己開示カテゴリーの出現時間を説明変数、配慮に関する4つの尺度得点を目的変数として重回帰分析(相手の自己開示⇒配慮)を行う。

(2) 配慮と自分の自己開示との関連

次に、さまざまな配慮によってどのような自己開示が促進されるかを検討するために、配慮に関する尺度得点を説明変数、自分の発話を分類した自己開示カテゴリーの出現時間を目的変数として重回帰分析(配慮⇒自分の自己開示)を行う。

(3) 相手及び自分の自己開示と開示後の精神的効果との関連

最後に、相手の自己開示及び自分の自己開示が、開示後の精神的効果に与える影響を検討するために、相手の発話を分類した自己開示カテゴリーの出現時間及び自分の発話を分類した自己開示カテゴリーの出現時間を説明変数、開示後の精神的効果の尺度得点を目的変数として重回帰分析(相手の自己開示⇒開示後の精神的効果, 自分の自己開示⇒開示後の精神的効果)を行う。有意であったもののみ表10・表11に示す。

表 10 重回帰分析結果：日本人

説明変数	標準化係数	目的変数	R2 乗値
(相手) 知的自己開示	.27 †	感情抑制配慮	.14 *
(相手) 応答的自己開示	-.29 *		
感情抑制配慮	-.32 *	(自分) 応答的自己開示	.10 †
(自分) 情緒的自己開示	.22 †	理解深化	.15 *
(自分) 共感的自己開示	.26 *		
(自分) 知的自己開示	.35 *	感情浄化	.17 *
(自分) 共感的自己開示	.42 **		

† p<.10 * p<.05 ** p<.01 *** p<.001

表 11 重回帰分析結果：中国人

説明変数	標準化係数	目的変数	R2 乗値
積極的関与配慮	-.47 **	(自分) 知的自己開示	.14 *
感情抑制配慮	-.46 ***	(自分) 身体的自己開示	.15 *
積極的関与配慮	.39 ***	(自分) 社会的自己開示	.17 *
感情抑制配慮	-.28 *		
感情抑制配慮	.34 *	応答的自己開示	.09 †
(相手) 知的自己開示	.41 †	理解深化	.12 †
(相手) 身体的自己開示	.40 *		
(相手) 共感的自己開示	.49 **		
(相手) 共感的自己開示	.53 ***	感情浄化	.19 *

† p<.10 * p<.05 ** p<.01 *** p<.001

5.5.1 日本人の場合

表 10 より、相手が知的側面を開示すると感情を抑制しようとする配慮が活性化するが、相手が感想や評価・助言などを開示すると感情を抑制しようとする配慮は低下する。その結果、自分もまた相手への評価や助言などを多く開示することが示されている。相手からの評価や助言は、相手が自分を信頼していることの表れと解釈できよう。そのため、相手のネガティブ・フェイスを侵害しないようにという他人行儀的な配慮が低減し、自分からも相手に対し遠慮なく評価や助言など活発に開示すると考えられる。

開示後の精神的効果については、自分の感情的な部分をさらけ出したり相手に共感を示すことは、相手から理解された、或いは相手を理解しているという、

相互の理解が深まったという満足感を促進することが推察される。また、自分の知的側面での不安や悩みを開示したり相手に共感を示したりすることは、感情の発散・浄化を促進することが推察される。今回の調査協力者は学生であったため、殊の外知的側面での悩みや不安が強かったと思われる。そうしたことから、知的側面の開示が感情の浄化やストレス解消を促進したと考えられる。

5.5.2 中国人の場合

表 11 より、相手に積極的に関与しようと配慮すると、自分の知的側面の自己開示は減少し、逆に社会的自己開示が増加する。積極的関与配慮は相手のポジティブ・フェイスを満たそうとする配慮である。相手のポジティブ・フェイスを満たそうと配慮すると、自分の研究や将来への不安といった知的な側面の開示は回避し、社会的象や友人の噂などといった社会的側面の開示を促進することがうかがえる。自分の知的側面を開示することは、自分のポジティブ・フェイスを満たすものであり、相手のポジティブ・フェイスを満たすものではない。一方、社会的側面の開示は、自分だけの領域ではなく相手にも共通した領域の開示である。そのために、社会的側面の開示は相手のポジティブ・フェイスを満たすことにつながると考えられる。

また、感情を抑制しようと配慮すると、身体的自己開示や社会的自己開示は減少し、応答的自己開示が増加する。言い換えれば、身体的な側面や社会的側面の開示の時にはあまり感情を抑制しなくてもいいが、相手への評価や助言については感情を抑制しながら慎重に開示することが推察される。つまり、身体的な側面や社会的側面の開示は相手のネガティブ・フェイスを侵害しないので感情を抑制する必要はないが、相手への評価や助言は相手のネガティブ・フェイスを侵害する危険が高いため感情を抑制しようと配慮すると考えられよう。

開示後の精神的効果については、相手が知的側面・身体的側面を開示することで理解が深化したという満足感が増加し、相手からの共感は相互の理解深化と同時に感情の浄化も促進している。相手からの開示は、それが内面的な側面か身体的な側面にかかわらず相手のことを深く理解できたという満足感につながることが推察される。また、相手から共感してもらうことは、相手から理解されていることの満足感と同時に、感情の発散や元気の源となることがうかがえる。中国人は日本人に比べて共感的自己開示が少ないという結果であったが、共感されることについては精神的効果が大きいといえよう。

5.5.3 日本人と中国人との比較

以上の結果と考察を踏まえて、以下に日中の相違点についてまとめる。

相違点の1つめとして「応答的自己開示」に関する配慮の違いが挙げられる。日本人は「応答的自己開示」を感情を抑えずのびのびと行うのに対し、中国人は感情を抑えようと配慮することが示されていた。親しい相手と互いに評価や感想などを述べ合うことは、日本人にとっては相手のネガティブ・フェイスを侵害するものではなく楽しい自己開示だが、中国人にとっては相手のネガティブ・フェイスを侵害する恐れのある自己開示であり、慎重な配慮を要することが推察される。

相違点の2つめとして精神的効果を高めるのは、日本人の場合は自分自身の自己開示であるのに対し、中国人の場合は相手からの自己開示によるということである。顧（2010）は自己開示の動機について、日本人は感情を発散するという動機が強く自己アピール的な自己開示が対人ストレスになるのに対し、中国人は自己アピール的な動機が強く、感情の発散が対人ストレスになることを検証している。日本人は自分が率先して開示していくことにより精神的効果が高められるが、中国人は自分が自己開示することはあまり精神的効果をもたらさず、相手からの自己開示、特に共感的自己開示により精神的効果を高めるといえよう。

6. まとめと今後の課題

以上、日本人学生と留学生とが親交を深めるための自己開示の在り方を探る研究の第1歩として、本研究では日本と中国の親しい同国人・女子学生同士の自己開示について、開示される側面・開示中の配慮・開示後の精神的効果を分析し、その特徴を検討してきた。その際、親しい者同士の会話データを使用することで、質問紙だけでは不可能だった特徴が明らかになり、さらに、日本人と中国人との共通点及び相違点を鮮明にすることができたといえる。自己開示の文化差を理解することは異文化コミュニケーションにおける誤解を回避し、より良好な人間関係構築に寄与するであろう。

本研究では日本と中国の同国人同士を対象としたが、日本人学生と留学生とが親交を深めるための自己開示の在り方を探究するには、双方の接触場面における自己開示を対象とすることが必要である。また、今回は話題として「目的」と「ファッション」を設定したが、他の話題ではまた異なる結果が出ることも予想される。話題を変えたデータ収集が必要であろう。最後に、会話の相互作用性を忠実に捉えるためには、時系列に沿った精緻な分析が不可欠である。以

上の3点を今後の課題としたい。

参考文献

- Aries, E.J., & Johnson, F.L. (1983) Close friendship in adulthood: Conversational content between same-sex friends. *Sex Roles*, 9, 1183-1196.
- Brown, P., & Levinson, S.C.(1987)*Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Caldwell, M.A, & Peplau, L.A. (1982) Sex differences in same-sex friendship. *Sex Roles*, 8, 721-732.
- Chen, G.M.(1995)Differences in self-disclosure patterns among Americans versus Chinese. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 26, 1, 84-91.
- 榎本博明 (1987) 青年期 (大学生) における自己開示性とその性差について 心理学研究, 58, 91-97.
- 榎本博明 (1997) 自己開示の心理学的研究 北大路書房
- 顧佩靈 (2010) 中国と日本の学生の対人関係における自己開示のあり方に関する比較研究 九州大学心理学研究, 11, 153-163.
- 一三三朋子 (1995) 母国語話者と非母国語話者との会話における母国語話者の意識的配慮の検討 教育心理学研究, 43, 277-288.
- 一三三朋子 (1999) 母語話者との会話における母語話者の言語面と意識面との特徴及び両者の関連—日本語ボランティア教師の場合— 教育心理学研究, 47, 490-500.
- 一三三朋子 (2000) 日本人との会話における外国人留学生の意識的配慮の検討 東京成徳大学紀要, 7, 21-28.
- 一三三朋子 (2003) 意識的配慮の共生的学習に関する因果モデルの検討—アジア系留学生の場合—教育心理学研究, 51, 175-186.
- 一三三朋子 (2004) 意識的配慮の共生的学習に関する因果モデルの検討—ボランティア日本語教室アジア系学習者の場合— 教育心理学研究, 52, 93-106.
- 一三三朋子 (2010) 自己開示の前提となる自己観に関する一考察—日本人大学生と中国人大学生の比較を通して— 文藝言語研究 言語篇, 57, 61-74.
- 全鍾美 (2010) 初対面の相手に対する自己開示の日韓対照研究—内容の分類からみる自己開示の特徴— 社会言語科学, 13, 123-135.
- 賈琦 (2008) 小集団討論場面における話者交替の日中対照研究 世界の日本語教育, 18, 73-94.
- Jourard, S.M.(1971) *Self-disclosure: An experimental analysis of the transparent self*. New York: Wiley-Interscience.
- Jourard, S. M., & Lasakow, P.(1958)Some factors in self-disclosure. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, 56, 91-98.
- 熊野道子 (2002) 自ら進んで自己開示する場合と尋ねられて自己開示する場合との相違 教育心理学研究, 50, 456-464.
- 蒙韞 (Meng Yun) (2010) 日中断りにおけるポライトネス・ストラテジーの一考察—日本人会社員と中国人会社員の比較を通して— 異文化コミュニケーション

- 研究, 22, 1-28.
- 奥山洋子 (2005) 話題導入における日韓のポライトネス・ストラテジー比較—日本と韓国の大学生初対面会話資料を中心に— 社会言語科学, 8, 69-81.
- 王建波 (2011) 日本語と中国語のポライトネス対照研究—医療場面における自然会話を中心に— 比較社会文化研究, 30, 1-12.
- 佐々木泰子・張瑜珊・鄭土玲 (2012) 中国人留学生は日本人との友人関係をいかに構築しているか—修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく視点提示型研究— 異文化間教育, 35, 104-117.
- 平静・松村瑞子 (2011) 日中会話におけるポライトネス・ストラテジー— 言語文化論究, 26, 73-84.
- 上原麻子・鄭加禎・坪井健 (2011) 日台中における大学生の友情観比較—「間主観性」概念の検討をもとに— 異文化間教育, 34, 120-135.
- 山口和代 (2001) 留学生の日本語表現と文化の影響—イメージ調査と言語表現調査から— 世界の日本語教育, 11, 225-241.
- 山口和代 (2002) ポライトネスに応じた言語形式と人間関係の認知—中国人ならびに台湾人留学生と日本人母語話者との比較の視点から— 社会言語科学, 5, 75-84.
- 横田雅弘 (1991) 自己開示からみた留学生と日本人学生の友人関係— 一橋論叢, 105, 629-647.